

聖書：Ⅱサムエル 12：15～31

説教題：もしかすると主が私をあわれんで

日時：2018年7月22日（夕拝）

前の 11 章でダビデは大変な罪を犯しました。それは姦淫の罪と殺人の罪でした。ダビデはその罪を隠蔽して、うまく乗り切ろうとしましたが、主はすべてを見ておられました。そして彼の罪を 12 章前半で明らかにされました。ダビデはそこで自分の罪を主に告白し、主の赦しを受けました。しかしその罪に伴う苦しみあるいは刈り取りは撤回されませんでした。主はナタンを通して、「あなたに生まれる息子は必ず死ぬ」と宣告され、その通り、バテ・シェバとの間に生まれた子は病気になったと 15 節にあります。ダビデにとって苦しい状況、困難な状況、悲しい状況です。そこでダビデはどうしたでしょうか。

まず私たちが見るのは祈るダビデです。彼は断食をして引きこもり、一晩中、地に伏して祈り続けました。彼の家の長老たちが、彼のそばに立って、彼を地から起こそうとしますが、ダビデは起きようとしません。また食事も取りません。そうこうしている内に 7 日が経ち、ついにその子は死にます。ダビデの家来たちは恐れます。もしこのことを王が知ったら、どんなことになってしまうか。自暴自棄になって何をされるか分からないと。しかし家来たちが小声で話し合っている様子を見てダビデは察知します。そして子どもが死んだことを知ると、地から起き上がり、体を洗って身に油を塗り、衣を替えて主の家に入り、礼拝をします。そして自分の家に帰って、それまで決して取らなかった食事を取り始めます。家来たちの目にはあまりにも奇異と映る姿です。子どもが死んで一層の嘆きの生活に入るのなら分かるが、死んだと知ると起き上がり、食事を取るとはどういうことなのか。ダビデの心は 22～23 節に明かされています。彼は言っています。私があのように断食して泣いたのは、もしかすると主が私をあわれんでくださり、あの子が生きるかもしれない、と思ったからだ。しかし今、あの子は死んでしまった。私はなぜ断食して祈らなければならないのかと。

ある人はダビデの祈りについて疑問を感じるかもしれませんが。ダビデは主から、子どもは死ぬと宣言されていた。そのような状況で、なお子どもが生きるようにと熱心に祈

ることは、示された御心に逆らう凶々しく空しい試みなのではないか。誉められたものではないのではないかと。ダビデの言葉から分かることは、彼は先の 14 節の主の言葉を決定論的な言葉としては聞かなかったということです。主は確かに「あなたに生まれる息子は必ず死ぬ」と言われたが、主はあわれみによって、そうされない可能性もあり得るのではないかと考えた。よく親は悪いことをした子どもに対して罰を宣告しても、その子がふさわしい悔い改めに進む時に、先に述べた宣告通りにはしないということがあります。親の方ではそのようにするつもりはあっても、最初からそれは言わない。ダビデもそのように考えたのでしょうか。主の言葉は語られたのだからと言って運命論的にそれを受け入れ、何もしていないことが良いことではない。主はむしろこうして私が祈ることへと駆り立てておられるのかもしれない。そしてこの祈りを通して、私がこの子を取り戻すことを今の私には隠している御心とされているのかもしれない。いずれにせよ、ダビデはまだ結果を見たわけではありません。そこで彼は絶望せずに祈ったのです。主はもしかすると私をあわれんで、・・・と。注目すべきは、ダビデは直前で大変な罪を犯した者なのに、そういう自分の祈りなど主は聞き入れてくださるはずがないとは思わなかったことです。人間的に考えるなら、こんな私の祈りなど神は耳を傾けてくださらないと考えて祈る気力も持たなくなるのが普通ではないでしょうか。しかしダビデは罪を告白し、主に赦された者として、祈りに打ち込んだのです。私たちもここから教えられたいと思います。物事は最後までどうなるか分かりません。主の摂理は私たちが前もって見ることはできないものです。その結果が出ていない事柄について、先に自分で結論を下し、何もしていないのはダビデの道は違います。私たちはどんな困難に追いやられても、苦しい状況に囲まれたても、ダビデのように主に祈って良いのです。罪の赦しをいただいた者として、「もしかすると主は私をあわれんで」との思いをもって、神に近づいて良いのです。

2 つ目に見るのは、祈りの結果とそれに対するダビデの態度です。果たして祈りの結果はどうだったでしょう。その答えは彼の息子が死ぬというものでした。ダビデは一生懸命、断食して祈りましたが願った通りにはなりません。ではダビデの祈りは意味がなかった、彼がささげた時間と労力は無駄だったと言うべきでしょうか。その後のダビデの姿を見ると彼はこの結果に怒っていませんし、ふてくされてもいません。また自分の中で整理がつかずに悶々として落ち込んでいたのでもありませんでした。彼は祈

りの結果が出た時、体を洗い、着物を着替えて、主の家で主を礼拝し、新しい生活へと進みました。すなわち彼はこのことを主からの答えとして受け止めたのです。しかも恭しく。そのことは彼がまず先に主の家で礼拝したこと、そのために体を洗い、着物を着替えてからそうしたことに示されています。

このダビデの行動から伺えることは彼は何が何でも自分の祈りを聞いてもらわなくてはならない！という形の祈りをしたのではなかったということです。神と根競べをするかのようにして、私の願いを聞かせよう！それによって神を押し切ろうという祈りをしたのではなかった。もしそうなら、その通りに行かなかった時、彼は大変な落胆の中に落ちたでしょう。しかしこのダビデの姿から伺えることは彼は自分の子の回復を熱心に祈りましたが、より深いところでは神が与えてくださる結果を受け入れる心の用意を持って祈ったのです。そういう意味では主のみこころなることを求めて祈ったのです。

ですから祈りとは私たちの願いを神に聞かせる手段ではありません。むしろ祈りは神の御心へと私たちの思いが合わされて行くための手段と言えます。そして祈りの結果として主の御心が現されたなら、それに従う。むしろそのことで主を礼拝する。それは自分が当初、良いと考えたこととは違うかもしれません。しかしそれは主が良いとお考えになって与えてくださったものです。ダビデはそのようにこの結果を受け取りました。ですからもういつまでもグジュグジュしているべきではなく、新しい生活へと出発した。ここに私たちがダビデから学ぶべきもう一つの姿があるのではないのでしょうか。

最後に見たいことは、その後に記されている2つのエピソードについてです。まず24～25節はソロモンの誕生です。バテ・シェバとの結婚関係は姦淫の結果、生じたもので、その間に誕生した第一子は先に見た通り、死にました。とするなら神はもうこの結婚を祝してくださらないと考えてもおかしくありません。しかし神はこの夫婦に新しいのちを与えてくださいました。しかも素晴らしいことに先にダビデに遣わされたのと同じ預言者ナタンが遣わされて、その子に「エディデヤ」という名が与えられます。欄外に注がありますように、これは「主に愛された者」という意味です。そしてご存知の通り、このソロモンはダビデの王位を継ぐ人です。このサムエル記第二7章でダビデ契約が語られましたが、あの約束は何とこのソロモンを通して成就して行きます。そして彼を通

してさらに将来のまことの王イエス・キリストが与えられて行くことになります。マタイの福音書1章冒頭のイエス・キリストの系図には、確かにこのソロモンの名前が出て来ますが、そこにはあえて「ウリヤの妻によって」という言葉も出て来ます。普通ならこのようなことは書きたくないこと、隠しておきたいことだと思います。しかしここに神の限りない恵みが示されています。神はこんな罪人たちを用いて救いの恵みを示してください。ダビデは大変な罪を犯した者でしたが、その罪を悔い改める者を神は赦し、あわれみ、このように豊かに恵んでくださる。先のダビデが必死に願ったにもかかわらず、その子が死んだというエピソードは人間的に見れば残念な出来事ですが、それは神がダビデを退けているということではなく、このように恵み深い神の取り扱いという文脈の中で読まれ、理解されるべきものと思います。

そしてもう一つは26～31節のアンモン人への勝利の記事です。アンモン人との戦いは、11章初めの部分に書かれていて話がまだ完結していませんでした。その結果がここに記されます。すなわちダビデはアンモン人に勝利し、平和を勝ち取ります。これもダビデが悔い改めを通して神の前に得た平和を補足するものとして描かれているでしょう。ダビデは大変な罪を犯しましたが、その罪を認め、告白し、主からの赦しを得ました。その神との間に与えられた平和の関係が、このアンモン人との戦いを経て与えられた平和の祝福とセットで述べられています。ダビデはこうして内側も外側も平和の状態を与えられたのです。ダビデが神との平和の内に生かされていたことが、このことを通しても象徴的に示されているのです。

以上の記事から私たちも学んで自分の生活に適用したいと思います。その一つは私たちもダビデのように祈るべきことについてです。私たちも彼のように罪を犯し、その報いを刈り取って当然の者たちです。日常生活の中では犯した罪と関係する様々な困難、苦しみ、戦いがあります。しかしその中で私たちは罪を告白し、赦しをいただいた者なら、ダビデのように祈って良いのです。何か悪い兆候を見て、もう終わりだ！もうどうにもならない！と言って、ただ暗い顔で時を過ごしてはならない。最後までどうなるか私たちには分かりません。「もしかすると主が私をあわれんで」と、ダビデと同じ思いをもって主に祈って良いのです。聖書は祈りを通して神に求めよ！と言っています。マタイの福音書7章7節：「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そう

すれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。」 ヤコブの手紙4章2節：  
「自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。」 「求めないがゆえに失う」ということにならないように。御前に近づくにどんなにふさわしくないと思う自分であっても、罪の赦しを得て、大胆に近づいて良い。そのことを覚えて私たちがダビデのように、あらゆることについて神に祈り、肉薄したいと思います。そしてもう一つのことは、その祈りを経て主がくださるものをダビデのように受け取って歩むことです。それは私の最初の願い通りのことではないかもしれませんが。しかしそれは主が良いお考えをもって私に与えてくださるものです。私たちは祈りを通して自分の率直な願いを述べつつも、主の御心へと心を合わされて行き、いただいたものを主の御心と受け止めて主を礼拝する者へ導かれたいと思います。そしてそのこと自体は私の目にすぐ良いことと受け止められなくても、なお大きなあわれみの御心と計画をもって導いてくださる神に信頼して、お従いする民の幸いに歩みたいと思います。